

WALDEN

HENRY DAVID THOREAU

新訳

森の生活

ウォールデン
ヘンリー・D・ソロー

訳・真崎義博
イラストレーション
本山賢司



新訳

森

の

生

活

ウォールデン
シリーズ・D・シロー

訳・真崎義博

イラストレーション・本山賢司

真崎義博 1947年東京生まれ

主訳書

ポール・ウィリアムス『ニューヨーク・ブルース』(音楽之友社)／バーバラ・ウッド『マグダラの古文書』(サンリオ)他多数

本山賢司 1946年北海道生まれ

月刊宝島ほかの雑誌に精力的にイラストレーションを発表している。冒険小説ファン。

WALDEN, OR LIFE IN THE WOODS

1854

Henry David Thoreau

新訳・森の生活(ウォールデン)

ヘンリー・D・ソロー 真崎義博訳

発行 昭和56年2月1日

発行所 JICC 出版局

郵便番号162／東京都新宿区揚場町15 セントラルコーポラス207

振替：東京7-170829 (株)ジック

電話：編集部 (03) 268-6313

営業部 (03) 268-6312

定価 1,500円

印刷所 壮光舎印刷株式会社

©1980 Yoshihiro Masaki, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社営業部宛御送付下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

1000-8105-3368

森の生活

目次

第一章 衣食住の基本問題

一、生活をみつめなおす目 1

二、さあ、まず着るものからはじめよう！ 8

三、開拓者たちは、はじめ「穴」のなかで暮していた 21

四、ぼくの家は湖のあたりの森のなか 32

五、ぼくはどの農民よりも自由だった 43

六、自然と同じようにシンプルで健康に生きてみよう 53

第二章 住んだ場所とその目的

気に入った土地をさがして住んでみること 62

第三章 読書について

本物の本を本当の精神で読むことは、高貴な修練だ 76

第四章 音について

森にいるといろんな音がきこえてくる 85

第五章 ひとりきりの時間

ぼくは、ぼくだけの小宇宙を持っている 98

第六章 来訪者たち

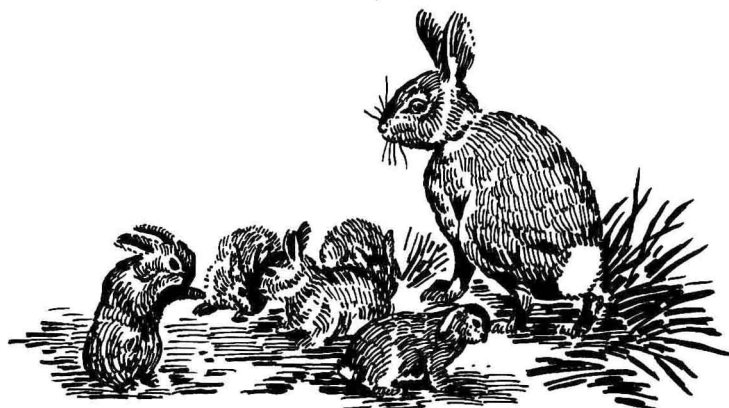
ぼくの家を訪問者たちを紹介しよう 106

第七章 豆畑

ぼくの豆畑の収支決算をしてみると…… 118

第八章 近くの村

村に出ると、とたんにならわさ話の洪水だ 128



第九章 ウォールデン湖

一、ウォールデン湖はぼくの美術館、そして天然の井戸だった

133

二、湖は鏡、そして太陽は光のダスターだ

142

第十章 ベイカー農場

ぼくらは毎日遠くから、新しい発見をもつて帰ってくるべきだ

154

第十一章 より高い原理

まず猟師、あるいは釣り人として森に入り、詩人なり博物学者となつて出てゆくこと

161

第十二章 隣人としての動物たち

人なつっこいネズミや宝石のような鳥、そして戦争するアリたち

172

第十三章 暖房について

湖が凍りはじめるとき、ぼくの小屋の窓ぎわはまきの山

187

第十四章 先住者と冬の訪問者

一、森のなかを歩くと先住者たちの廃墟が点在している

199

二、雪を踏みしめて、頭の長い農夫や詩人たちが訪ねてくれた

207

第十五章 冬の動物

フクロウが寂しげに鳴き、キツネは悪魔のように遠くで吠えた

212

第十六章 冬の湖

氷の下で泳ぐ小ガマスは、黄金とエメラルドの魚だ

223

第十七章 春

湖の氷が音をたてて溶けはじめると、造化の神が動きだす

234

第十八章 結び

こうしてぼくの森の生活が終わった

249

あとがき

260

生活をみつめなおす日



これからの話の大半は、マサチューセッツ州コンコードの森にあるウォールデン湖のほとりで、ぼくが自分で作った家に住んでいたときに書いたものだ。そこは、いちばん近くの家でさえ一マイルも離れているという人里離れた所で、生活に必要なものはすべてぼくの肉体労働だけで手に入れていた。そして、そこには二年と二か月の間暮していた。いまは、また文明社会の世話になっている。

町の人たちがぼくの生活ぶりをあれほど調べたりしなければ、ぼく個人のことを本にして、人々の目にとまるようになどしなかっただ

ろう。そういう町の人を失礼だという人がいるかもしれないけれど、ぼくにはぜんぜん失礼だとは思えなかった。周囲の状況を考えれば、むしろとても自然で、あたりまえのことにさえ思えたのだ。町の人たちはぼくが何を食べているのか、さみしくはないか、こわくはないかといったようなことをきいた。ある人は、ぼくが収入のどれぐらいを慈善のために使ったかに興味を示し、またたくさんの家族がいる人は、ぼくが衰れたこともたちを何人ぐらい養ったかということに興味をもっていた。そんなわけで、ぼくにそれほど興味のない人々には、ぼくがこの本でこうした質問に答えることを許してもらいたい。大部分の本では《ぼく》という一人称が省かれているけれど、この本ではそれを省くようなことはしなかった。この自己中心的態度が大きなちがいになっている。ぼくらはだいたい、話をするのは結局一人称だということを忘れがちなのだ。世の中に自分自身と同じくらいよく知っている人がいたら、それほどまで自分を語るなどということはしないはずだ。残念なことに、ぼくの経験がせまいので、どうしても自分自身の問題に限られてしまう。さらに、ぼくの側からは、ものを書く人に、たんに他人の生活について耳にしたことではなく、自分自身の生活についての簡明で正直な文章を書くようにお願いしたい。たとえば、遠く離れた土地から親類に書く手紙のような文章だ。というのも、もしその人の生活が誠実なものならば、ぼくにとってその人の書く文章は、遠くの土地での生活そのものにちがいないからなのだ。これからぼくが書くことは、たぶん、貧しい学生たちへのことばが多いと思う。そうでない人は、自分にあてはまるような部分を受け入れてくれるだろう。コートを着るときに縫い

目をひっぱってむりやり合わせようとする人などいないとぼくは信じている。それがぴたり合う人には十分役に立つのだから。

ぼくが話したいのは中国の人やサンドウィッチ島の人ではなく、ニューイングランドに住んでいてこのページを読むべき人たちだ。ぼくが話したいのはきみたちの現状、特にこの世界やこの町でのきみたちの外面的な現状についてであって、それが何なのか、今のようになさけないものでいいのか、もつと良くできないものなのかどうかについてだ。ぼくはずいぶんコンコードを歩きまわったけれど、店にしろ、オフィスにしろ、畠にしろ、いたるところで、そこに住む人たちがさまざまに苦しい目にあっているように思えた。バラモン教について聞いた話のなかに、四方を火に囲まれて太陽をまともに見ることとか、炎の上に頭を下にしてわが身を吊すこととか、首を上に向けてじつと天を見つめ、「ついに元はの姿勢にもどれなくなり、首がねじれてしまつて液体以外のものはのどを通らなくなつてしまうこと」とか、木に縛りつけられたまま一生を過すとか、いも虫のようにはいまわつて広大な国の広さを計ることとか、棒の上に一本足で立っていることとかいうものすごい話があつたけれど、ぼくが毎日見ている光景はこうした自発的な苦行以上に信じがたく、驚くべきものだ。ヘラクレスの一二の難業も、町の人たちが受けているものにくらべたら取るに足らないものだ。それは一二しかないのだし、必ず終りというものがあるのだから。けれど、町の人たちが怪物を退治するとか生けじりにするとか、あるいは何かしごとをやりとげるといった光景は、ついに一度も見ることができなかった。町の人には、ヒュードラの首のつけ根を熱い鉄の棒で焼い

てくれるイオラオスという友人がいなかったために、頭をひとつづつとすぐに二つの頭が出てきてしまうのだ。

ぼくは、農場や家や納屋や牛や農具を相続するという不幸を背負つた町の若者を見ている。そうしたものは、手放すより手に入れる方が楽なのだ。自分たちがどういう野原で働くのかを疊りのない目で見られるように、広い草原に生まれ、狼に育てられた方がよかつたのに。彼らを土の奴隷にしたのは誰なのだろう？

人はひとにぎりの土地だけで生きてゆかなければならない運命にあるのに、なぜ六〇エーカーの土地で食べてゆかなければいけないのだろう？ なぜ生まれた瞬間から自分の墓を掘りはじめなければならぬのだろう？ 彼らはこうしたことを自分の肩で受けとめて、なんとかして人間としての人生を歩いてゆかなければならないのだ。たて七五フィート、よこ四〇フィートの納屋（オージアスの牛舎はけつしてきれいなではないのだ）、一〇〇エーカーの土地、耕地、芝、牧草地、林、こうしたものを押しながら人生という道のりをはって進み、いまにもおしつぶされ、窒息しかかっているあわれな不滅の魂にどれほど出会つたことだろう。そうした不必要な重荷を相続して苦しむことのない人間にとつてさえ、数立方フィートの肉体を管理し養ふことはたいへんな労働なのだ。

けれど、人間は思いちがいをして苦しんでいる。肉体の大部分は、やがて土のなかへ入りこみ、肥料になるのだ。ふつう必然性と呼ばれるうわべの運命に翻弄され、古書にもあるように、人はやがては朽ち果て、いずれは盗人がもつていつてしまう財産をたくわえることとにきゆうきゆうとしている。これは愚か者の生活だ。終りのとき



Henry D. Thoreau.

になってみれば(それ以前ではないにしても)、それに気づくだろう。デウカリオンとピュラは、石を自分たちの頭ごしに後ろへ投げて人間を造りだした、と言われている。

Inde genus durum sumus, experiensque laborum,
Et documenta damus quâ simus origine nati.

これを、ローリー²⁾は格調高くこう訳している。

それ以来、我種の堅き心は、苦痛と心の痛みに堪えつつも
我肉体が石の如くあることを証しつづける。

石を頭ごしに後ろへ投げて、どこへ落ちるかを見ようとしないうばかげた神託への盲目的な追従について、これ以上のおしやべりをすることはやめておこう。

この比較的自由な国においてさえ、たいていの人々は、ただの無知や思いがいのために、自分でつくりだした気苦労と、生活という莫大なとるにたらない労働に追われていて、そのいちばんすばらしい果実を取れないでいる。彼らの指が過度の労働のためにひどくきちなくふるえてしまつて、取ることができないのだ。じつさいに、労働者は日々を本当に誠実に暮すためのひまもなく、他人に対していちばん人間らしい関係を保つ余裕もない。そんなことをしていたら労働の市場価値が下がってしまう。自分自身が機械になりきる以外の余分な時間がないのだ。いつでも自分の知識をフル回転させて

いなければならぬ人間が、自分の無知を自覚していられるはずがない——成長のためにはそれが必要なだけだ。ぼくらは、そういう人を批判するまえに、時にはただで食料や衣料品を提供し、ぼくらの熱意で元気づけてあげなければいけないのだ。ぼくらの人間のうちでもいちばん良質な部分は、果実についた粉のように、細心の注意をはらわなければもちつづけることができない。それなのに、ぼくらは自分自身や他人をそういうふうになやしくは扱わないのだ。

だれもが知っているように、ある人は貧しくて生きてゆくこともつらく、時には息をするのにもあえぎあえぎしているほどだ。この本を読んでいる人々のなかにも、自分で食べた夕食、すり切れてゆく(あるいはすでにすり切れている)服やクツの代価を支払うことができず、貸してもらっている人から時間をうばい、返すべき時を使ってここまで読み進んでいる人がいるはずだ、ぼくには確信がある。経験によつて鋭くなつたぼくの眼には、きみらの多くがどれほどいやしく、こそこそした生活をしているかがはつきりと映る。しごとにありつこうとか、借金からぬけだそうとかして、いつもぎりぎりのところにいるのだ。借金というのは古くからある泥沼で、ラテン人はこれを *res alienum* へ他人の真ちゅうと言っている。何種類かのコインが真ちゅうでできていたからだ。他人の真ちゅうで生活し、死に、埋葬される。明日には返すと約束し、支払うこともできぬまま今日、死んでゆくのだ。人のきげんをとり、気に入つてもらおうとあらゆる手を使い、ただ法にはふれないように注意を払う。ウソをつき、ゴマをすり、投票をし、ひたすらていねいにとつとめ

て身をごめ、うすつべらで湯気のような人の良さにまで自分をくらませ、そうやってまで人のクツやボウシやコートや馬車を作らせてもらい、いろいろな品物を輸入させてもらおうとする。そして、古いタンスや壁の中、あるいはもつと安全なレンガづくりの銀行——場所はどうかあれ、また額の多い少ないもどうかあれ、とにかく病気にそなえていくらかでも貯えようとして、かえってからだを悪くしているのだ。

頃はときどき、北部も南部も両方を奴隷にしようという鋭くて陰險な支配者が山のようにいるのに、黒人奴隷といわれる野蠻で多少縁どおい奴隷制度に注意を向けるなんて、よくそこまで軽薄になれるものだと思うことがある。南部の親方をもつのはつらいことだけれど、北部の親方ではなおさらこまる。とはいえ、自分が自分を奴隷として働かせること、これこそが最悪なことなのだ。人間の尊厳！ 昼となく夜となく市場へと家畜を引いてゆく人を見てほしい、その人のなかに尊厳などというものが見られるだろうか？ 彼の最高の義務は、馬にかいばと水をやることなのだ。海運業の利益とくらべたら、彼にとつての宿命とは何なのだろうか？ 彼は土地の名士のために馬を駆っているのではないだろうか？ 彼がどれほど神聖で不滅だというのだろうか？ いかにちぢこまってこそそこ動きまわり、一日中なんとなくビクついているかを見よう。彼は神聖でも不滅でもない。自分がしたことでもかち得た評判と、自分に対する自分の評価の奴隷であり囚人にすぎないのだ。世間の評判というものは、ぼくら自身の個人的な意見にくらべたら、ひ弱な暴君だ。人の運命を決めるもの、いやむしろそれを示すもの、それは自分が

自分をどう思っているかということだ。幻想と想像に満ちた西インド地方においてさえ、自己の解放はむずかしい——それを実現するどんなウイルバ³⁾ーフォースがいるのだろうか？ それにまた、自分たちの運命へのあまりにもあからさまな関心を表面に出すまいと、最後の審判の日へ向かつて背当てるクツションを織っている地主の婦人のことを考えてみてほしい。まるで、永遠を傷つけることなしにときを浪費できると思っているようだ。

ほとんどの市民は、静かな絶望の生活をおくっている。あきらめと呼ばれるものは、確かなものとされた絶望のことなのだ。人は絶望の街から絶望の田舎へと移つても、ミンクやマスクラットの美しさで自分をなぐさめなければならぬ。ステレオタイプではあるけれども、意識されない絶望は、人類のゲームとか楽しみといわれているものの下にさえ隠れているのだ。そのなかに気晴らしはない。それは労働のあとにくるものだからだ。とはいえ、絶望的なことはしないというのも、知恵のひとつの特徴なのだ。

宗教問題のことばをかりれば、人間の第一の目的は何かとか、人生に本当に必要なものや人生の方法とは何かといったことを考えると、どうも、今のやり方がいちばん気に入ったのでわざとそれを選んだ、というふうに見える。なのに、人はこれ以外に選択の余地はないと思ひこんでいるのだ。けれど、注意深い健康な者は、太陽が昇って様々な生き方を照らしだしているということを忘れてはいない。偏見をすてるのに、遅すぎるといふことはないのだ。どんなに古くからあるものでも、証明もなしに信じられるような考え方とかやり方など、ひとつもありはしない。誰もが口々に言い、また、今

日真実であるとして疑いもしないことが、明日には誤りであることがわかるかもしれないし、畑に恵みの雨を降らせる雲だと信じていたものが、実はただの煙にすぎないということがあるかもしれない。老人たちができつこないということも、やってみるとできたりするものだ。老人には古いやり方、若い人には新しいやり方だ。昔の人は、火を燃やしつづけるために燃料を運んでくる、などということは知らなかっただろう。今の人は釜の下に少しばかり乾いた木をくべて、昔の人もビックリというやり方で、鳥のようにスピーディに世界をまわる。老人は、若者ほど教師にはむいていない。失ったもののほど得てはいないからだ。いちばん賢明な者がその生活から絶対的な価値について少しでも学んだかどうか、これは大いに疑うべきだ。じつさい、老人は、若者に与えられるだけのだいいなアドヴァイスなどなひとつとしてもってはいない。彼ら自身の体験はそれほど部分的であり、その生涯も個人的な理由のために（と彼らは思いこんでいる）無残にも失敗しているのだ。そして、彼らにはその体験を信じるだけの誠実さが残っているかもしれないし、あるいは、たんに昔ほど若くはないというだけのことなのかもしれない。ぼくは三〇年ちかくこの地球に住んでいるけれど、年上の人から価値のある、いや、真剣みのこもったアドヴァイスでさえ、一度も耳にしたことはない。適切なことはなにひとつ言ってくれなかった。おそらく言えないのだろうと思う。ここにある人生、それは大部分ぼくが試みていない実験だ。けれど、彼らがやってみたいということなど、ぼくには何の役にも立ちはない。ぼくに価値のある体験があるとすれば、それはきつと、ぼくの教師たちが一度も口にしたことのないものにちがいない。

ある農夫はよくにこう言う、「人間は野菜だけじゃ生きてゆけせんよ。骨の元になるようなものはまるで入っていませんからね」そして、骨の元になるようなものを体に入れるために、「一日の何分のいくつかを熱心にささげるのだ。しかも、そう言いながら、草を食べてできた骨格をもつ自分の牛のうしろについている。そしてその牛は、あらゆるじやま物をおしのけて、彼とガタガタいうスキとを引っぱってゆくのだ。ある物は、無気力で病んだ社会では生活必需品であり、別な社会ではたんなるぜいたく品であり、またほかの社会では知られてさえないのだ。

人間の生活は、そのどの部分をとってみても祖先によって峰も谷もきわめられ、何もかも考えに入れられている、と思う人もなかにはいるだろう。⁴⁾イヴリンによれば、「賢者ソロモン王は、木々の間の距離まで定める勅令」をだした。また、ローマの執政官は、「人は何回まで隣の庭へ入って落ちているドングリをひろってもよいか、そしてその何割がその家の人のものになるか、を定めた」。ヒポクラテスなどは、ツメの切り方まで指示していた。指の先端に合っているのがよくて、それより長くても短くてもいけないのだ。人生の変化とよろこびを枯らせてしまったと思われる退屈と倦怠は、明らかにアダムにまでさかのぼる。けれど、人間の能力はけっして計算ずみではない。先例によつて、人に何ができるのか判断してはいけない。試みをしたものなど、まだほんのわずかなのだ。これまでの失敗がどんなものでも、「悩むことなかれ、わが子よ、おまえが手をつけずに残したものを、誰がおまえに当てがうものか？」なのだ。ぼくらは、多くの単純なテストで自分たちの生活を試してみること

もできる。たとえば、ぼくの豆を熟させるその同じ太陽は同時に、ぼくらの地球のような惑星を照らしている。もしこのことをしっかりと覚えていたら、いくつかのまちがいは避けられただろう。きょうの太陽の光は、ぼくがくわ入れをしたときの光ではない。星は、何と美しい三角形の頂点だろう！ 宇宙のさまざまな所で、なんと遠く、ちがった生き物が同じ瞬間に同じものを見つめていることだろう！ 自然と人間の生活は、ぼくらひとりひとりの体質がちがうようにさまざまだ。人生が他人にどんな展望を与えるか、誰に語ることができるよう？ ぼくらにとって、ほんの一瞬お互いの目を通して見るということ以上に大きな奇蹟が起こりうるだろうか？ ぼくらは、一時間のうちに世界のすべての時代を生きなければならぬ。そう、あらゆる時代のあらゆる世界を。歴史、詩、神話！——目を見るほどの、そして学ぶことの多い他人の経験を読む、これ以上の方法はない。

人々が善であるというものの大部分は悪である、とぼくは心の底で信じている。そして、もしぼくに後悔することがあれば、それはどうもぼくの良き行いということになりそうだ。あんなに良い行いをするとは、どんな悪魔に取りつかれてしまったのだろうか？ おじいさん——七〇年この世に生き、多少なりとも名譽を手に入れた——あなたがどれほど良いことを言っても、ぼくには、そんなものからは離れた方がいいという、抵抗したい声が聞こえてくる。ひとつの世代は別な世代のくわだてを、座礁した船のように見捨ててしまふものなのだ。

ぼくは、ぼくらが信じている以上に多くのことを、安心して信じ

てもいいと思っている。自分に対する心づかいをすこしやめて、その分を他へまわしてもいいだろう。自然というのは、ぼくらの強みと同じくらい弱みに対しても適したものなのだ。ある人たちのようにいつも心配し、緊張しているのは、もうほとんど一種の不治の病いといつていい。ぼくらは、自分でしている仕事の重大性を大げさに言うようにしむけられている。けれど、いかに多くのことが手つかずのままになっていることか！ もし病気になるっていったらどうだったか？ ぼくらのなんと用心深いことか！ これはまるで、信仰というものを避けられるなら、それに頼って生きることなどやめてしまおうというほどの決心だ。昼間は警戒心をとかず、夜になるといやいやながらも祈りをして、不確かなものに身をまかせる。自分の生活に敬意を払い、変化の可能性を拒否して生きてゆくことを、ぼくらは徹底的に心の底から強要されているのだ。これが唯一のやり方さ、とぼくらは言う。けれど、じつさいは、ひとつの円の中心から無数の半径がとれるように、無数のやり方があるのだ。あらゆる変化は見る目には奇蹟だけれど、それは刻一刻と起きている奇蹟なのだ。孔子はこう言った、「知っているのは知っていることだけであり、知らないことは知らないこと、ということを知る、それが本当の知だ」。イマジネーションのうへの事実を知性の事実に変えることができる、最後には、すべての人間が自分の生活をその基礎のうえにうちたてることになるだろう、とぼくは思っている。

さあ、まず着るものからはじめよう！



ここで少しのあいだ、前にぼくの言った面倒事とか心配事とはどんなものなのか、また、そのことについてぼくらはどれほど悩む、あるいは少なくとも心をくばる必要があるのかを考えてみよう。生活のためにギリギリの線で必要な物とは何で、それを手に入れるためにどんな方法がとられてきたのかを知るだけの目的でも、皮相な文明社会のなかでプリミティブな、フロンティアな生活をしてみる価値はあるだろう。また、商人たちの古い日記帳を見てみたり、人々がいちばんよく買った物は何だったか、商店では何を在庫して

いたか、つまり何が日用必需品だったかを調べることに価値はあるだろう。というのも、どんな時代の進歩も、人間の生存の基本的な法則にはほとんど影響をおよぼしてはいないからなのだ。それはちやうど、ぼくらの骨格が祖先のものと、たぶん、見分けがつかないのと同じことだ。

《生活に必要な物》とぼくが呼んでいるのは、人間が自分自身の努力で手に入れる物のなかでも、最初から、あるいは長い間使っているうちに野蠻さからか、貧しさからか、哲学からか、とにかく、それなしでやってゆこうとする者が、絶無ではないにせよ、ほとんどいなくなってしまうような物のことだ。多くの生き物にとって、この意味での生活に必要なものはひとつしかない。食物だ。たとえば、草原地帯のバイソンにとつては、ほんの数インチの味のよい草と水ということになる。もつとも、森のねぐらとか山の日かげを求める場合は別だけれど。とにかく野生の動物は食物とねぐら以上のものは求めないのだ。こういう気候に住む人間にとつて必要な物はすべて、食物、住居、衣服、燃料の四つの項目のどこかへ入れることができるだろう。それは、こうした物を確保するまでは、自由と成功の見込みのある生活の、本当の問題を考へることができないからだ。人間は住居だけでなく、衣服や料理することを考へだした。そして、たぶん偶然に火の暖かさを知り、やがてそれを使うようになり、最初はずいぶん少なかった火のそばにすわるといことが、今のうちに必要なことになったのだらう。ネコやイヌも、人間と同じこの第二の天性を身につけている。ぼくらは適当な住居と衣服を使つて、体内の温度を適度に保っている。そして、ぼくらの体温より高



Glis

い外部の熱、燃料を使うことから料理がはじまったと言ってもよいのではないだろうか？

博物学者のダーウィンは、フエゴ諸島の住民についてこう言っている——ちゃんと服を着て火のそばにすわっている自分たちの一行はそれでも暑すぎはしないのに、その裸の原住民たちは火からずっと遠くにいるにもかかわらず「火にあぶられて汗を流している」ことにびっくりした、と。また、ニュー・ホランドの人々は、ヨーロッパ人が服を着てふるえているときでも、平気で裸で暮しているという。こうした未開人の強さと文明人の知性をかねそなえることは不可能だろうか？ リービヒによると、人間のからだはストーヴで、食料は肺での内部燃焼を持続させる燃料だそうだ。だからぼくらは寒いときにはたくさん食べ、暖かいときにはそれほど食べないのだ。動物の体温はこのゆっくりとした燃焼から生まれ、それがあまり速いと病気になるたり死んだりする。また逆に、燃料が切れたり通風がわるくて火が消えたときにもそうなる。もちろん、体温の発生は火そのものとは関係ない。

類推はこのくらいにしておこう。これまでの話からわかるように、《動物の生命》という言い方は《動物の熱（体温）》という言い方とほぼ同義なのだ。食料は、ぼくらの体内の火を保つ燃料と考えることができるからだ——燃料は食料を調理し、外部から暖めることによってからだの熱にプラス・アルファを加えているだけだ——住居と衣服も同じように、そうして発生し吸収される《熱》を保つ役割しかない。

こうして、ぼくらのからだにどうしても欠くことのできないのは、

暖かさを保つこと、ぼくらの体温を保つこと、ということになる。食料、衣服、住居に加えて、ベッドに対してもなんという苦心をすることだろう。ベッドはぼくらのねまきであり、この住居のなかの住居をつくるために、ぼくらは鳥の巣や胸の羽毛をうばっている。それはちょうど、穴のはじに草や木の葉でベッドをつくっているモグラのようなものだ。貧しい人はいつも、この世の冷たさをなげいている。そして悩みの大部分を、社会的な意味でも肉体的な意味でも、この冷たさのせいにしてている。ある気候のもとでは、夏になると極楽のような生活ができる。そうになると、食べ物と料理する以外、燃料は unnecessary になる。太陽が火のかわりになって、多くの果物はその光線で十分に料理されたようになるのだ。また、食料の種類はたくさんあって、すぐに手に入る。それに衣服や住居といったものもほとんど不要になってしまう。今のこの国では、ぼくの経験からすると、少しばかりの道具、ナイフ、オノ、スキ、手押し車、それから勉強熱心な人にはランプ、文房具、数冊の本といったものが必要になるけれど、これは金が少しあれば買えるものだ。ところがおりかな人間は、生きるため——つまりいつも快く暖かく生きるため——そして最後にはニュー・イングランドで死ぬために、地球の裏側の未開で不健康な所へ行き、一〇年も二〇年も貿易に身をささげたりする。必要以上に金持ちになった者は快く暖かいのではなく、不自然に暑くなっているのだ。ちよつと前に書いたように、彼らは料理されているのだ——もちろん現代的な流行感覚に。

ほとんどのぜいたくや、いわゆる人生の慰めと言われるもの多くは、人類の向上にとってどうしても必要というわけではない。そ

れどころか、明らかにそれを妨害するものなのだ。ぜいたくと慰めということについて言えば、これまでの賢人たちは貧しい人々以上に飾り気のない乏しい生活をしていた。中国やインドやペルシャやギリシアの古代の哲学者たちは、外見上は最も貧しく内的には最も豊かな階級の人間だった。ぼくらはそういう人々についてあまり知らないけれど、今ある程度の知識だけでも、あるというだけでたいへんなことだ。このことは、近代の人類を改革し、ぼくらが恩恵を受けた人々についても言える。ぼくらが自発的な貧しさと呼ぶ、優越した視点から見るのでなければ、人間生活を公平に賢明に見ることのできる者はひとりもない。農業でも商業でも芸術でも、ぜいたくな生活から生まれる果実はぜいたくそのものだ。今日では哲学教授はいくらでも、哲学者はいなくなってしまった。とはいえ、かつては哲学を生きたことが敬服に値したのだから、それを教えることも敬服に値することではある。哲学者であるということはこむずかしい思想をもつことではないし、もちろん学派を築くなどということではない。そうではなく、知を深く愛し、それが示す通りの飾り気のない、何ものにも左右されない、寛大な、信頼にもとづいた生活を送ることなのだ。ということは、人生の問題を理論の上ばかりでなく実践の上で解決することでもある。

いわゆる偉大な学者とか思想家たちの成功というのは、ふつうはごますり風な成功であって、王者の風格とか男らしさといったものに欠けている。彼らは自分の祖先たちがそうであったように、たんに妥協によってどうにかこうにか生きていくだけで、気高い人類の生みの親などではけっしてないのだ。それにしても、人間はなぜ墮

落してゆくのだろうか？ 何が家族をダメにしてゆくのだろうか？ いろいろな国を無気力にし、破壊しているぜいたくというものの本質は何だろうか？ ぼくら自身の生活にはそんなものはないと言えるだろうか？ 哲学者というのは、外面的な生活においてさえ、同時代人よりも一歩先を歩いているものだ。他の人々と同じようには食べたり住んだり着たり暖まったりしないものだ。哲学者であり、しかも、他の人々よりよい方法で生命の熱を持続したりはしていない、ということがありうるだろうか？

これまでぼくが話してきたような方法で暖をとった人間は、次に何を望むだろう？ より多くの豊かな食物とか、より大きくすばらしい家とか、より美しいたくさんさんの服とか、余裕のある消えることのない火とか、こういった同じ種類の単に量的に豊かな暖かさでは困る。生活に必要なものを手に入れたら、人間には、余分な物を手に入れること以外にも取るべき道があるのだから。それは、地味な苦勞から得た余暇で人生の冒険をすることだ。種子が地中に幼根をのばしたのだから、土はそれに適しているらしい。そして今や、自信をもつて芽を上へのぼしてもよさそうだ。空へ向って自分をのばさないとしたら、人間はいったい何のためにこれほどしっかりと地に根をおろしたというのだろうか？ 高等植物は、地上から高く伸びて空気と光のなかで実を結ぶからこそ価値があり、下等食用植物とはちがう扱いをうけるのだ。食用植物は、たとえ二年生であっても、根ができればまるでしか栽培されず、このために上の部分が切り取られ、花が咲く季節でも多くの人にはその見分けがつかないといった程度の扱いしかうけない。